



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3219 号 2016.8.28 発行

虐待や性被害...子ども聴取、心の傷に配慮

読売新聞 2016年08月27日

児相、検察、警察 いずれかの代表で...専門女性スタッフも

虐待や性被害などに遭った子どもを聴取する時、児童相談所や検察、警察が別々に聞くのではなく、代表して検事が話を聞いたり、依頼された専門家が話を聞いたりする取り組みが進んでいる。被害の場面を何度も思い出させないように配慮しつつ、事実を正確に聞き出すのが目的だ。



モニタールームの画面に映された面接室。聞いてほしいことを電話で伝えることもできる(神奈川県伊勢原市のチャイルドファーストジャパンで)

「心に傷を負った子どもから話を聞くのは本当に難しい」と、検事が子どもから聴取する場面に立ち会った経験を持つ関係者はため息をつく。

検事が「触られたんだよね」と質問した途端に眠り込んでしまう子どもや、質問に対し、全身をこわばらせて「分からない」としか答えない子ども

もがいたという。こうした反応について『被害状況を思い出すと恐怖感がよみがえってしまう』と考え、自分を守ろうと無意識に心のスイッチを切ってしまうのだろう」と関係者は推測する。

児童相談所や検察、警察などから、同じ質問を繰り返し受けることも多い。厚生労働省と最高検、警察庁は2015年10月、子どもから話を聞く場合は、試行的に3機関を代表して1人が話を聞くよう求める通知を、都道府県や地検、県警などに出した。厚労省によると、代表による聴取は同年12月まで11件を数える。

通知より前から独自に取り組んできた機関もある。仙台地検は14年度から、子どもの話を聞く場合は、同地検が中心となって児童相談所や宮城県警と調整し、いずれかが代表して聴取し、内容を共有している。子ども宅で検事が話を聞き、別室にいる警察官がマイクやカメラで様子を見聞きして、1回で済ませたこともある。

児童相談所や検察、警察から依頼を受け、研修を受けた女性スタッフが子どもから話を聞いているのが、NPO法人「チャイルドファーストジャパン」(神奈川県伊勢原市)だ。15年2月には、話を聞くための面接室と、カメラで様子を見聞きできるモニタールームを新設。モニタールームで検事や警察官が子どもの話を聞いて、捜査に役立てている。

同法人理事長の医師、山田不二子さんは、「検事や警察官は事件の筋書きを想定して聴取することが多く、大人の言うことに『違う』と言いづらい子どもは、質問されたことをそのまま肯定しがちだ。専門のスタッフが聞いた方が、子どもの心を傷つけず、事実を正しく聞き出すことができる」と話す。

社会福祉法人「カリヨン子どもセンター」(東京都)は、子どもから話を聞く部屋を11年に設けた。これまで子どもの担当弁護士などの利用が43件あった。

同センターが依頼した女性弁護士が子どもから話を聞き、様子を録画する。子ども担当

の弁護士が録画したDVDを児童相談所や警察に渡し、被害状況を把握してもらって保護や捜査に役立てる。各機関が改めて話を聞く場合も負担を軽減できるという。

児童心理に詳しい北海道大学教授の仲真紀子さん(発達心理学)は、「答えを誘導したり、暗示したりするような聞き方をしてしまうと、正確な事実確認ができない。親をかばうなどして、なかなか本当のことを話さないケースもあり、話を聞くのは、知識やスキルを身につけた専門家が望ましい」と話す。

仲さんによると、聴取後には必要な治療やカウンセリングを受けられるようにすべきだという。さらに、被害を受けた子どもの親や、虐待してしまった親に対しても、子どもへの接し方などを助言するようすすめている。(吉田尚大)

## 住みよいまちへ目標 兵庫県、福祉の「基本方針」改定 神戸新聞 2016年8月27日

### 福祉のまちづくり基本方針の主な2020年度の目標

	2015年度	20年度
都市公園の園路・広場のバリアフリー化率	68%	70%
病院、百貨店など多数が利用する施設のトイレのバリアフリー化率	91%	96%
高齢者の住む住宅のうち、手すり2カ所以上設置または屋内の段差を解消した住宅の割合	48%	65%
福祉タクシーの導入台数	-	50台増

### ノンステップバス導入率の目標

	2015年度	20年度
神戸	71.8%	83.0%
阪神南	57.8%	69.0%
阪神北	71.1%	82.0%
東播磨	54.3%	65.0%
北播磨	27.9%	46.0%
中播磨	77.0%	88.0%
西播磨	25.6%	44.0%
但馬	18.4%	36.0%
丹波	19.2%	37.0%
淡路	0.0%	18.0%
<b>県平均</b>	<b>58.2%</b>	<b>70.0%</b>

兵庫県は、福祉施策の方向性を定めた「福祉のまちづくり基本方針」を改定した。障害者や高齢者、妊婦ら、誰もが住みやすい環境づくりへ、24項目にわたり2020年度の目標値を設定。バリアフリー化率について、都市公園のトイレは45%（15年度は37%）、1日平均乗降客数3千人以上5千人未満の鉄道駅舎は100%（同70%）を目指す。

基本方針は5年に一度見直しており、今回の期間は16～25年度の10年間。中間年の20年度に目標値を設けた。

出入り口の段差をなくした低床の「ノンステップバス」導入率は、乗り合いバスの70%（同58%）まで引き上げ、県内10地域ごとの目標も掲げた。

百貨店や病院、映画館など多数の人が利用する施設に関しては、車いす利用者用の駐車区画・トイレや視覚障害者誘導用ブロックの整備など、5項目を満たした施設の割合を70%（同65%）にする。

また設備面だけでなく、今回はソフト面にも目標値を設定。障害者や専門家らによるアドバイザーが、誰もが利用しやすい施設になっているかを点検、助言する「チェック&アドバイス制度」利用件数について、150件（同53件）を目指す。

県によると、県内の75歳以上の人口は、15年の71万人が10年後には97万人まで増えると推計されている。障害者の社会進出も進んでいるなど、福祉を巡る社会情勢は変化している。県都市政策課は「市町や事業者などと連携しながら、さまざまな人にきめ細かく対応できるまちづくりを目指したい」としている。(斉藤正志)

## 玄関先でゴミ収集 滋賀・愛荘町、9月から高齢者や障害者見守り

産経新聞 2016年8月27日

ゴミ収集で安全を見守りー。愛荘町は、家庭ゴミをゴミ集積所に持ち出すことが難しい高齢者や障害者などの世帯を対象に、玄関先での収集事業を9月から始める。利便性を図るほか、体調などに異変がないか、安全も見守る。同町によると、同様の事業は県内自治

体では例がないという。

「愛荘町ふれあい収集事業」として実施する。介護保険の要支援や要介護の認定を受けている人や、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている人などが対象。

ごみ収集ボックスを玄関先に置いてもらい、決められた日に業者が収集。マンションなど集合住宅も玄関先で収集する。ごみが出ていない場合、声かけをし、応答がなければ町役場を通じて緊急連絡先に問い合わせをして安否確認をする。

利用を希望する人に申請してもらい、実施を決定する。30年3月までのモデル事業として行い、改善点などを洗い出すという。

## 東京パラリンピックに向け 専門機関が支援へ

NHKニュース 2016年8月26日



4年後の東京パラリンピックに向けて、障害者スポーツの競技力を高めようと、横浜市にあるトレーニングの専門機関が支援を始めることになり、26日、担当者が陸上競技の車いすのクラスで活躍する選手のトレーニングを見学しました。

この取り組みは、スポーツ選手の強化を科学的に支援している「横浜市スポーツ医科学センター」が市内の障害者スポーツ施設と共同で始めま

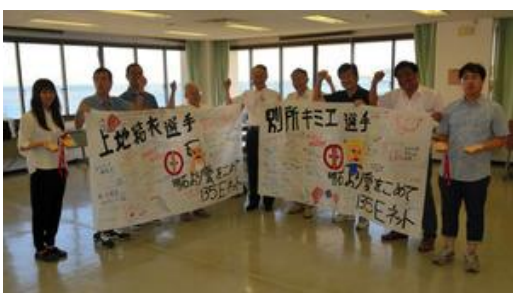
した。

26日は横浜市内の陸上競技場で、リオデジャネイロパラリンピックの陸上競技、車いすのクラスに出場する中山和美選手などの練習を、医科学センターの担当者が初めて見学しました。担当者は、選手が車いすで競技場を走る様子を撮影し、車輪を回す腕の動きや姿勢などを確認したあと、選手から体のどの部分を鍛えたいかなどを聞き取っていました。センターは、今後、東京大会に向けて具体的な支援の方法を検討していくことにしています。

中山和美選手は、「練習のサポートを受ける機会が少ないので、とてもありがたいです。4年後に向けて競技人口が増えるきっかけになってほしい」と話していました。

横浜市スポーツ医科学センターの吉久武志さんは、「選手を間近で見て腕や体の使い方などがわかった。選手たちに合ったサポートをしていきたい」と話していました。

## 兵庫) パラ五輪2選手へ寄せ書き 明石の障害者団体など 朝日新聞 2016年8月27日



上地、別所両選手へ贈る寄せ書きとクッキーを披露する障害者と団体関係者たち＝明石市中崎1丁目の同市役所

明石市の障害者団体や福祉施設でつくる「明石障がい者地域生活ケアネットワーク（135Eネット）」が25日、リオデジャネイロ・パラリンピックに出場する同市ゆかりの2選手を応援しようと、寄せ書きとクッキーを市に届けた。

贈られたのは、車いすテニスの上地結衣選手と卓球の別所キミエ選手。クッキーはほぼ実物のメダル大で、手作りを担った「サポートセンター曙（あけぼの）」の片岡淳さん（36）は「本物のメダルをとって」とエールを送った。

横2メートル、縦90センチほどの布でできた寄せ書きの中心には両選手の似顔絵があり、のべ100人が「全力で」などと書き込んだ。似顔絵は、生活介護事業所「すたじおぼっち」の伊庭翔平さん（27）が両選手の写真を見ながら半日かけて仕上げたという。伊庭さんは「がんばってね」と話した。



市から26日に手渡された別所選手は「リオに持って行く」と喜んだという。上地選手には27日に届けられる。(高松浩志)

### 高齢者を車いすにベルトで“拘束16時間”、食堂や廊下に放置…午前4時から午後8時まで放置のケースも 大阪

産経新聞 2016年8月26日

大阪府は26日、同府羽曳野市の介護付き有料老人ホーム「グランバ羽曳野」で車いすの入所者をベルトで約16時間拘束するなどして介護保険法に違反したとして、運営会社「エス・エッチ・エー」(羽曳野市)に対し、介護報酬を9月から6カ月間、2割減額する処分をした。

府によると、夜に眠ろうとしない入所者数人が転倒するのを防ぐため車いすに拘束し、最長で午前4時から午後8時まで食堂や廊下に放置していた。さらに鼻から管を通して流動食を流し込む「経管栄養」を職員が無資格で実施し、これに対する府の聴き取りに虚偽の答弁をするよう指示した。

この施設を巡っては、社会福祉士・介護福祉士法に基づく登録をせずに職員に医療行為をさせたとして、医師法違反などの疑いで羽曳野署が昨年、会社と元施設長を書類送検。大阪地検堺支部が今年7月、不起訴処分としていた。

### 知的障害者ら1000人が追悼 来月21日

東京新聞 2016年8月27日

殺傷事件を受け、大さん橋ホール(横浜市中区)で九月二十一日に開かれる「ピープルファースト大会 in 横浜」の全体会で、知的障害者ら千人が、事件の犠牲者を追悼し、事件をテーマに意見発表する見通しになった。

「そもそも、施設が山あいにあるのはなぜ」と知的障害者の視点で撮影・編集した現場周辺のルポ映像を放映。障害者を排除する優生思想や、今回の事件の匿名報道に対し、知的障害者自身が考えを語っていく。

当初は、韓国を訪問したメンバーによる従軍慰安婦に関する報告などを予定していたが、事件を受けて緊急の実行委員会を開催、内容を組み替えることにした。実行委の広報担当者は「容疑者の言葉や考え方が報道で流れ、恐怖感を感じる知的障害者がいた」と事件の衝撃の大きさを指摘する。

「ピープルファースト」は四十年ほど前、米国オレゴン州で「私たちは障害者である前に、人間である」という思いでスタートした知的障害者による活動。国内では一九九四年に始まり、会員は全国に三百人を数える。年一度、各地で開かれる大会は会員以外も参加できる。

参加は原則、事前予約が必要という。費用は二十二日の分科会と合わせて三千元。二十一日午後四時から、大さん橋ホールの全体会会場で犠牲者に花や折り鶴をささげる。この時間帯は参加無料とし、より多くの折り鶴が寄せられるよう呼び掛ける。問い合わせはピープルファースト横浜＝電045(382)3055＝へ。(梅野光春)

### 模原殺傷1か月 命、人権考える動き広がる

読売新聞 2016年08月27日

事件発生から1か月。津久井やまゆり園では献花台に供えられる花束が絶えない(26日、相模原市緑区で)＝伊藤紘二撮影

#### ■追悼集会やライブ企画

19人が死亡、27人が重軽傷を負った相模原市緑区の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件。26日で発生1か月を迎えたが、犠牲者



の死を悼む献花は絶えない。障害者の団体による追悼集会やライブイベントも企画され、事件を機にあらためて、命の大切さや人権を考える動きが広がっている。

知的障害を持つ当事者らが1000人規模で集まり、課題などを話し合う「ピープルファースト大会 in 横浜」(9月21、22日)では、一部のプログラムを変更。横浜市中区の大さん橋ホールで開く全体会(同21日)で事件概要を報告し、花と折り鶴をささげて犠牲者を追悼する。

会場では、匿名報道などをテーマにディスカッションも実施。障害者が希望を持って生きることができる社会の実現に向けた宣言も行う予定だ。

22年前に秦野市で誕生し、障害者と健常者のメンバーでつくるロックバンド「サルサガムテープ」は9月4日、東京都渋谷区のライブハウス「渋谷ラ・ママ」で、追悼ライブを開催する。

同バンドは事件を受け、ホームページで緊急メッセージを発表。「平和とほほえみを生み出す人たちが、なぜ惨殺されなければならないのか」と憤り、「犠牲になられた方々の無念に、深い傷を負われた方々の苦しみに祈りとロックンロールをささげましょう」と訴えた。

バンドリーダーのかしわ哲さん(66)は「障害を持った人たちの人生が、どうして不幸だと言えるのか。他人が決めつけるのは間違っている。今だからこそ、ロックで前向きなメッセージを送りたい」と思いを語る。追悼ライブの参加は事前応募が必要で、メール(salsagumtape@hitension.org)で受け付けている。

事件発生1か月となった26日、やまゆり園の正門前に設けられた献花台では、花を手向けて犠牲者を悼む人の姿が見られた。

NPO法人・自立生活センター立川(東京都立川市)の理事長を務める奥山葉月さん(46)は、自身も骨形成不全症を患って車いす生活を続けている。「障害を持つ仲間がこんな目に遭って、怖かっただろうと思う。家族もつらいだろう」と悔しさをにじませた。

障害者を支援する立場としても「障害者が生きづらくならないか、影響を心配している」といい、「障害者が社会に不利益をもたらすという考えを持つ人は、見方を変えるべき。私たちが発信していかなくては」と力を込めた。

黒岩知事は同日、「引き続き入所者やご家族、職員への支援に全力をあげていく。園の再生に向けた取り組みも本格的に進める」とのコメントを出した。

## 相模原殺傷1カ月 障害者施設の備え進まず 県内調査 神戸新聞 2016年8月27日

不審者対策調査の主な結果	
不審者対応訓練の実施	0.0%
鍵や電子キー暗証番号の定期的な変更	1.0%
防犯の知識、技能習得の研修実施	4.9%
警察へのホットライン整備	7.8%
訪問者に名札などを着けて不審者と区別	9.8%
警備会社への連絡システム整備	17.6%
不審者侵入時の危機管理マニュアル作成	20.6%
遊離誘導や通報など緊急時の役割分担	31.4%
警報ベルやブザーなどの設置	31.4%
防犯カメラの設置	51.0%

神奈川県相模原市の知的障害者施設で19人が刺殺された事件を受け、兵庫県が県内の障害者入所施設を対象に不審者侵入対策について調査した結果、対応訓練をしていた施設はゼロで、危機管理マニュアルを作っていた施設も2割にとどまることが分かった。

事件発生から26日で1か月となったが、県内でも不審者対策が十分に整っていない現状が浮き彫りになった。

調査は7月29日～8月10日に実施。設備面やソフト面について28項目を聞き、109施設のうち102施設から回答があった。

防犯カメラは約半数が設置する一方、警備会社への連絡システムを整えているのは17.6%。訪問者に名札などを着けさせて不審者と見分けられるようにしていた施設は1割に満たず、鍵や電子キーの暗証番号を定期的に変えているのはわずか1%だった。

記述式で聞いた国や県への要望では、防犯設備導入への助成制度創設、モデルとなる対応マニュアルの提示を求め

る声が多かった。県警に直接つながるホットラインの整備を望む回答もあった。

また「地域に開かれた施設運営に逆行するような対策になってはならない」との意見も。県障害者支援課は「国の施策の動向を踏まえ、『地域との共生』とのバランスを考えた対策が取れるよう支援したい」とする。(斉藤正志)

## 相模原障害者殺傷「このまま終わらせない」 風化懸念の声

共同通信 2016年8月27日

相模原市の障害者施設殺傷事件から1カ月となる26日、現場の「津久井やまゆり園」に設けられた献花台には多くの花束が手向けられた。障害がある人や福祉関係者からは「このままで終わらせたくない」と風化を懸念する声が上がった。

「亡くなったあなた方のことは忘れません」。目が見えず耳が聞こえない全盲ろうの東京大先端科学技術研究センター教授、福島智さん(53)は19人の犠牲者を悼んで19種類の花を手向けた。

指で言葉を伝える「指点字」の通訳を介して取材に応じた福島教授。犠牲者の匿名発表について「それぞれの家族と人生があったはずなのに性別と年齢しか分からない。せめて花だけでも違う種類を供えたかった」。障害学が専門の同教授は事件をテーマにした研究に取り組む意向を示した。

障害者の自立を支援するNPO法人の理事長で、自身も骨に先天性の障害がある東京都立川市の奥山葉月さん(46)は、この日初めて献花に。大きな花束を供え「障害者が生きていける社会がみんなにとって生きやすい社会だ」と訴えた。

福祉関係の仕事をしている川崎市多摩区の男性(30)は数十秒間、黙とう。「いつの間にか忘れられてしまわないか」と不安をにじませた。

## 障害者施設 防犯対策学ぶ 相模原殺傷事件受け 読売新聞 2016年08月27日 佐賀

神奈川県相模原市の知的障害者施設で46人が殺傷された事件を受け、県は26日、県内の障害者支援施設の防犯対策に関する研修会を佐賀市内で開いた。7割以上の施設で防犯マニュアルを策定していない現状が報告され、施設関係者らが緊急時に備えた対策強化について意見を交わした。

研修会には、施設長ら約40人が出席。県障害福祉課の五郎川展弘課長が事件後、県内27施設を対象に行ったアンケートで、防犯マニュアルを策定している施設は7施設にとどまり、防犯訓練を行っている施設はなかったと説明した。緊急時に警察など外部への通報体制は、全27施設で確保されていた。

県警生活安全企画課の百武正隆課長補佐は、防犯対策として、▽受け付けを通った来訪者と、通っていない人物を判別できるようにする▽防犯設備の点検を徹底する▽緊急事態に備え、職員の具体的な役割を決める—などを挙げた。

意見交換は非公開で行われた。出席者によると、施設側から県に対し、防犯グッズを購入するための補助や、障害者への偏見や差別をなくすための啓発を求める声が出たという。

## 「障害 正しく理解して」 やまゆり園事件1カ月 東京新聞 2016年8月27日

「大切な人が生きている。これだけで、ものすごい価値がある」一。県立知的障害者施設「津久井やまゆり園」(相模原市緑区)の殺傷事件から26日で1カ月。「障害者がいなくなればいい」とのゆがんだ感情から、凶行に及んだとされる植松聖容疑者(26)に今も「許してはいけない」との声が、県内の障害者団体関係者から上がり続ける。自らも知的障害者の子どもを育て、横浜市心身障害児者を守る会連盟代表幹事を務める清水龍男さん(64)は、命の尊さを強く訴えている。(志村彰太)

清水さんは障害者差別をなくすため、市が着手すべき取り組みを考える市障害者差別解消検討部に所属し、偏見のない社会を目指してきた。「考えが非常に薄っぺらく、障害者への無理解が犯罪を引き起こした。障害を知れば差別がなくなり、このような事件も抑止できる」と悔しがる。

**障害者への偏見をなくそうと努める清水さん＝横浜市港北区で**

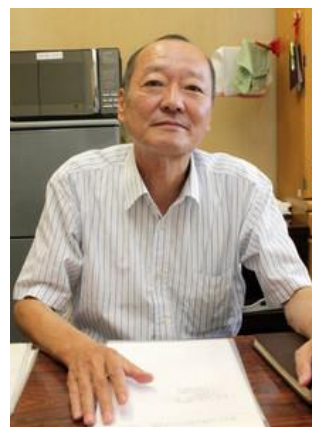
清水さんは、ダウン症で重度の知的障害がある長男祐貴さん（28）を育ててきた。生後間もなく先天性の心臓疾患も判明した祐貴さんは、一歳で手術。その後、C型肝炎を患い、現在も投薬治療を受けている。

こうした経験から「命を助けることに集中していた。障害を恨むとか、考えたことはない」と言い切る。仕事と介護を両立させるため、入所施設を利用するものの休日は親子で過ごす。年に二回は旅行にも行く。「施設は、親亡き後の社会生活に向けた準備でもある。決して子どもを捨てることではない」と話す。

祐貴さんと言葉で意思疎通するのは難しい。しかし、いつも明るく朗らかだという。「知的障害者はコミュニケーションを取れない」と一部で言われることには「努力が足りないだけ」と憤る。「どんなに重度の人でも、工夫で気持ちは伝わる」と確信している。

祐貴さんとも、指さしや表情、声の大ききで気持ちを伝え合える。「思春期の時は落ち着きがなく、言うことを聞かなかった。大変な面もあるが、子育ての達成感是他の子どもと変わらない」

事件の背景に「障害を正しく理解しないこと」があると感じる清水さんは、「容疑者の精神疾患が犯罪につながった」と捉えられることに懸念を抱く。「精神障害者は危険だという偏見が広まらないか。排除や対決型の論理では、差別はなくなり、再発も防止できない。社会全体で障害を理解し、包み込む必要がある」。ちぎれるような思いで、今後の啓発活動のあり方を探っていく。



## 社説：相模原の事件 差別の芽を見つめて

朝日新聞 2016年8月27日

相模原市の障害者施設で19人が殺害された事件から、1カ月がたった。その衝撃は今も多くの人々の心を波立たせている。

26歳の容疑者の言葉からは、底知れない闇がうかがえる。「障害者は生きていても無駄」「安楽死させた方がいい」

警察の調べには、「(犯行は)不幸を減らすため。同じように考える人もいるはずだが、自分のようには実行できない」と供述しているという。ゆがんだ動機というほかない。

ただ、この事件は重い問いを投げかけた。容疑者と同じ考えの者などいない。障害の有無にかかわらず誰もが堂々と生きられる社会だ——そう胸を張って断言できるだろうか。

事件のあと、障害者や家族から様々な発言が相次いだ。その多くは、当事者や関係者でなければ見えない冷酷さが社会の中に常在する現実を映していた。

「事件は起こるべくして起きた」。障害のある息子を持つ女性は「障害者に対する一般の感覚を最悪の形で集約したのが容疑者だと思う」と語った。

事件の前、長男に重い障害のある野田聖子・衆院議員は、ネット上でこう書かれた。医療に金ばかりかかる息子は見殺しにするのが国益だ、と。

茨城県の教育委員は特別支援学校の視察後、「妊娠初期にもっと(障害の有無が)わかるようにできないのか。(職員も)すごい人数が従事し、大変な予算だろう」と発言し、非難を受けて辞職した。

命の尊さを、社会にとって有意義かどうか、経済的な影響はどうか、といった基準ではかりにかけると意識が随所に潜んでいることは否めない。



障害者に対する差別の歴史は古く、そして新しい。日本でも戦後に「優生保護法」がつけられ、「不良な子孫の出生を防止する」との趣旨で20年前まで続いた。優生思想は公の記述からは消されても、人々の意識からは拭えていないのではないか。

1カ月前の事件を、常軌を逸した人間による特異な犯罪と片付けてしまうなら、この本質を見失う。問われているのは、社会の中に厳然とある差別的な意識そのものだからである。

身体に特徴がある人、会話の手段が異なる人。そもそも人間は誰であれ同じではない。性格も思考も多様なように、一人ひとり違うことが自然なのだ。どんな違いも認め合い、尊重し合える共生の社会を築くには、不断の意識改革をするほかない。

悲惨な事件を二度と起こさぬためにも、身近な差別の芽を見つめることから始めたい。

### 社説：相模原事件 共有したい生きた証し

中日新聞 2016年8月27日

相模原市の障害者殺傷事件から一カ月余。大切な人生を奪われたのは誰なのか。いまだに社会は知ることができない。事件を深く記憶に刻み、教訓を学び続けるためにも、生きた証しを共有したい。

♪僕らはちゃんと生きてきたよ

ちゃんと夢だっけ見ていたよ

風や空や海だっけ感じることもできたのに

僕らをどうして不幸せと、勝手に決めるのか？

「19の軌跡」という歌詞の一節である。脊髄性筋萎縮症を患うさいたま市の見形（みかた）信子さん（47）らが、犠牲になった十九人を悼み、創作したものだ。

犠牲者のいのちの痕跡を表現したかったというだけではない。むしろ、これまでとこれからの自らの生の証しとして書いたという。

それぞれが名前を持ち、守られるべき尊厳のある人間なのに、なぜ「十九」という無機質な数字でしか語られない世の中なのか。その理不尽への怒りや悲しみ、「自分は消されたくない」という心の叫び。切実な思いが伝わる。

障害の有無を超えて、同じ心境にある人も多いのではないか。

犯罪被害者を実名、匿名のどちらで発表するかは、犯罪被害者等基本法に基づき、警察の判断に委ねられている。いつもは重大事件の被害者を実名で発表するのに、今度の事件では伏せたままだ。

身元につわる情報は、社会の光と影を映し出す手掛かりとなりうる。そうした公益性や公共性よりも、犠牲者に障害があったことや遺族のプライバシー保護、また遺族の要望を警察は重視した。

その価値判断そのものに、障害者への偏見や差別意識が潜んでいないか。犯罪史に残る事件の風化に手を貸すようなものだ。そんな批判が絶えないのもうなずける。

障害のある子を持って恥ずかしいとか、兄弟姉妹の結婚や就職に差し支えると思ひ、泣く泣く施設に託す家族もいる。優生思想的な風潮がそうさせるとすれば、国を挙げて根絶せねばならない。

見形さんも「隠されて育った」と言う。施設で生涯を終えることに耐えられず、家族の元を飛び出した。いまでは障害者の自立を手助けする活動に携わる。

周りに支えられて、地域で暮らす障害者は増えている。以前よりも、多様な個性を守る仕組み、いのちを慈しむ意識が徐々に広がっている事実もまた知ってほしい。

遺族や被害者が声を上げられる社会づくりへ向けて、メディアとしても使命と責任を銘記したい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

